

もの言う牧師のエッセー 第237話

「心の白い人」

エンジニアになる夢をかなえるため、奨学金を受けて新聞販売所で働きながら、学校に通う新聞奨学生としてミャンマーから3月に来日したミュジャさん（21）は、新宿区大久保の施設で研修を終え、世田谷区にある配属先の毎日新聞駒沢販売所に到着した後、リュックの中にあるはずの約7万円入り封筒がないことに気付いた。「ありえないこと！パニックになってしまった」。カチン州で農業を営む父が、田んぼを半分売って工面してくれた当面の生活費で、ミュジャさんの全財産だった。「父に申し訳ない。家族の幸せのため、大事な田んぼを売ってくれたのに…」。新しいスタートを踏み出そうとした矢先の試練に、打ちのめされそうになった。

相談を受けた同販売所の堀将一所長は、「駅の切符売り場で電子マネーの入金をした時に落としたのでは」と思い当たり、地下鉄副都心線・西早稲田駅に電話したところ、届けられていることが判明。拾得者は駅員に名も告げず、謝礼を受け取る権利も放棄すると伝えていたという。ミュジャさんは、「これほど高額でも戻ってくるとは。本当に驚いた」そうで、拾得者については、「とても『心の白い』人。他人の心を理解できる、優しい人だと思う。私もあなたを手本にして精いっぱい生きていきたい。」なるほど！人の善い行いを手本にして実践する。

「これは信頼できる言葉ですから、私は、あなたがこれらのことについて、確信をもって話すように願っています。それは、神を信じている人々が、良いわざに励むことを心がけるようになるためです。これらのことは良いことであって、人々に有益なことです。」

テトスへの手紙3章8節、

とはこのことだと思わず膝を打った。“白い御子”であるキリストは、人類を罪から救うために十字架にかかり、最大の善行を示された。その事実を信じる者は、キリストを手本にして善行に励み、精一杯生きるのである。そして、その様な人々が増殖すれば、その先に、福音の目的である「神の国」が実現し、今の日本にとって最も有益な社会が築かれよう。

2016-6-3

